

## ヨハネの手紙第一2章15-17節 「世の愛」

### 1A 聖書の語る「世」 15a

1B 世を愛される神

2B 悪い者による支配

3B 滅ぼされる制度

### 2A 御父の愛と相いれない愛 15b

1B 過剰な情熱

2B 神との交わりを阻むもの

3B 神の敵

### 3A 世にあるもの 16

1B 肉の欲

2B 目の欲

3B 暮らし向きの自慢

### 4A 過ぎ去る世と永らえる信者 17

1B 過ぎ去る世と世の欲

2B 永らえる、御心を行う者

ヨハネによる手紙第一2章を開いてください。私たちの学びは、先週で14節まで来ました。今晚は15-17節を見て行きます。

<sup>15</sup> あなたがたは世も世にあるものも、愛してはいけません。もしだれかが世を愛しているなら、その人のうちに御父の愛はありません。<sup>16</sup> すべて世にあるもの、すなわち、肉の欲、目の欲、暮らし向きの自慢は、御父から出るものではなく、世から出るものだからです。<sup>17</sup> 世と、世の欲は過ぎ去ります。しかし、神のみこころを行う者は永遠に生き続けます。

使徒ヨハネは、愛情を込めた呼びかけを前回読んだ、12節から14節までで行いました。「子どもたち。」「父たち」そして「若者たち」です。子どもたちには、「あなたがたの罪が赦されたからです」と宣言、父たちには、「初めからおられる方を、知るようになった」と言い、若者たちには、「悪い者に打ち勝った」と話しました。私たちが、自分の罪が赦されたことを知るのはどれほど大切なことでしょうか。悪い者、悪魔に打ち勝っていることを知ることも、死活的です。そして霊的成長して、父のように人々を養い、世話し、治めるようになっていたら、「初めからおられる方を知ること」がどれほど慰めになるか知れません。父である者たちも、自分自身に父が必要です。すべての源であられる父なる神が必要なのです。

こうやって呼びかけましたが、ヨハネは、第一の手紙の中全体で警戒していることを、ここで初め

て取り上げます。それは「世」であります。

### **1A 聖書の語る「世」 15a**

「<sup>15a</sup>あなたがたは世も世にあるものも、愛してはいけません。」と初めに言っています。

### **1B 世を愛される神**

ここで言っている「世」とは何でしょうか？そもそも、「創 1:1 はじめに神が天と地を創造された。」とあって、「1:31 神はご自分が造ったすべてのものを見られた。見よ、それは非常に良かった。」と創世記 1 章は締めくくられています。そして、主は世にあるものをこよなく愛しておられ、ヨナ書を思い出すと、暴虐と残虐にまみれていたアッシリアの首都ニネベの人たちが、悔い改めているのを見て、神は災いを思い直されました。唐胡麻のことを惜しんでいたヨナに対して、「4:11 ましてわたしは、この大きな都ニネベを惜しまないでいられるだろうか。そこには、右も左もわからない十二万人以上の人間と、数多くの家畜がいるではないか。」と主は言われています。ヨハネ 3 章 16 節には、「神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに世を愛された。」とあるのです。

### **2B 悪い者による支配**

ですから、神は世を愛し、世にあるものを愛しておられるはずですが、ここでは「愛してはならない」と、真逆のことをヨハネは教えているように見えます。ここで、ヨハネが何を言おうとしているのか、第一の手紙の中でよく分かります。「5:19 私たちは神に属していますが、世全体は悪い者の支配下にあることを、私たちは知っています。」悪い者の支配下にある世であって、神の造られた世界、世のことではありません。悪い者、悪魔によって歪められている状態、神に反抗している世と言ってよいでしょう。

主が、「ご自分が造ったすべてのものを見られた。」と言われましたが、神は、サタンも含めてよいものとして造られていました。イザヤ書 14 章では、明けの明星として出てきます。ラテン語の言葉「ルシファー」で有名です。太陽の光である神が間もなく来られることを予め示す光であり、神の栄光を反映されている天使長だったのです。ところが、明けの明星は高慢になりました。「14:13-14 お前は心の中で言った。『私は天に上ろう。神の星々のはるか上に私の王座を上げ、北の果てにある会合の山で座に着こう。密雲の頂に上り、いと高き方のようになろう。』」そして、明けの明星は陰府に落とされ、穴の底に落とされる定めとなります。エゼキエル 28 章では、「守護者ケルビム」として出てきます。神の御座のそばにいて、礼拝し、また礼拝を導く天使長です。「28:14-16 わたしは、油注がれた守護者ケルビムとしてあなたを任命した。あなたは神の聖なる山にいて、火の石の間を歩いていた。あなたの行いは、あなたが創造された日から、あなたに不正が見出されるまでは、完全だった。あなたの商いが繁盛すると、あなたのうちに暴虐が満ち、こうしてあなたは罪ある者となった。そこで、わたしはあなたを汚れたものとして神の山から追い出した。守護者ケルビムよ。わたしは火の石の間からあなたを消え失せさせた。」ここでは、ケルビムは、「あなたが創

造された日から、..完全だった。」と主は言われているのです。ですから、すべてのもの、世界とそこにあるものはすべて良く、美しかったのですが、サタンが高慢になり、地上に落とされました。

そのサタンが、蛇によってエバに現れ、夫アダムに食べてはならないと命じられていた、善悪の知識の木から取って食べたのです。そして、世界は人が支配するように任されていたのに、悪魔が支配するようになりました。ですから、元々は良いものとして造られたものが、悪魔によって歪められ、神に反抗するようになりました。この制度、あり方こそが愛してはいけないとヨハネが戒めているものです。

ですから、神は、金もうけのためには手段を選ばない社会を憎んでおられます。けれども、その中に動かされている人々を憐れんでおられます。また金そのものは悪ではありません、新しく生まれ神の子どもになった者たちが、そのような世界で主の栄光のために働くことさえ願われています。権力にまみれた世界、政治、いや学界や、福祉のような世界でもあり得るでしょう、神は権力をふるまうことを忌み嫌われます。しかし、政治の中にいる人々を憐れんでおられて、正義や公正を行われることを願っていますし、キリスト者になった者たちがその中で世の光として輝かれることを願っています。世にいる人々を愛する神ですが、世そのものの制度やその中身は、神に敵対しているのです。

### 3B 滅ぼされる制度

今、権力のことを話しましたが、ローマ 13 章 1 節には、上から来る権威はすべて神から来ていることが書いてあります。けれども、その与えられた力と自由を、神の中で用いるのではなく、神に反抗するために用いるのが、世の制度です。古くは、ノアの箱舟の後に、人々が再び増えて行った時、ニムロデという人がいました。彼は、「地上で最初の勇士」となり、「主の前に力ある狩人であった」とあります(創 10:9)。これは正確には、「主に対抗する力ある狩人」と訳したほうがよいでしょう。そして、彼はバベルの町などを立てました。人々がその地域に集まり、神は地上に満ちなければいけないと命じておられたのに、一所に集まって、「11:4 自分たちのために、町と、頂が天に届く塔を立てて、名をあげよう。」自分たちのために建てるのです。そして自分たちが天に届くのです。神のようになろうとしているわけで、高慢になっているのです。そして太陽や月や星を拝む占いが始まり、偶像礼拝が始まりました。神は言葉をばらばらにされたことで、世界に彼らを散らされましたが、ここを「バベル」と呼びます。この地域に後世、バビロンが建てられ、バビロンは、歴史上の帝国であると同時に、神に反抗する世の制度を象徴するようになりました。

終わりの日、イエス様が再臨される幻が黙示録 19 章にあります。その手前の 17-18 章に、大淫婦と表現される女が登場します。王たちと淫行を重ね、巨額との富を得て、金銀で身を飾り、金の杯で飲んでいました。彼女は獣の上に乗っていますが、その獣には神を冒瀆する名で満ちています。そして、女は「17:6 聖徒たちの血とイエスの証人たちの血に酔っている」ともあるのです。彼

女の名が、「17:5 大バビロン、淫婦たちと地上の忌まわしいものの母」というものです！彼女が、一日のうちに倒れる姿が 18 章に出てきます。これは都を表していて、この都から甘い汁を吸っていたものたちも、一気にすべてを失い嘆いている姿が書かれています。世とそこにある欲望が一気に滅びる姿なのです。これが聖書の描いている世であり、私たちは、世に生きていながらにして、世に属するものではないということを知るべきです。

## 2A 御父の愛と相いれない愛 15b

次に「<sup>15b</sup> もしだれかが世を愛しているなら、その人のうちに御父の愛はありません。」とあります。

### 1B 過剰な情熱

この「愛」は、アガペという言葉の動詞です。しばしば、アガペは神にしかない愛という説明を受けますが、確かに神のような愛はこの世にはありませんが、アガペとは、「自分を度外視して、犠牲を払う愛」という意味であり、世を愛する時にもヨハネは使っています。「人々が光よりも闇を愛した」と福音書にはありますが(3:19)、そこにもアガペの動詞が使われています。今、ヨハネが気にしているのは、「過剰な情熱」です。すべてを犠牲にしても、どんなことがあっても、これはやりますというほど情熱を傾けているものです。世にあるものについて、そのような愛の情熱を向けたら、その人には御父への愛がないということです。

「情欲」という言葉が聖書に出てきますね。これは必ずしも性欲だけのことではありません。人間にはいろいろな欲求が与えられています、それを神の御心、神の意図しておられるように用いずに、度を越すこと。一線を越すことを話しています。それぞれの欲求は、神のために用いるように作られており、それ自体に間違いがないのです。食欲、性欲、社会的な欲求、承認欲求などもあります、それら自体は間違っていないのです。神のために用いるのです。黒人公民権運動を導いたキング牧師が、「人が偉くなるという欲求を否定する必要はない。イエス様は、偉くなりたければ全ての人のしもべになりなさい。」と言われた、というような説教をしたことがあります。キリスト者には、その欲求自体が悪であるとする傾向が出てしまいがちで、食べてはいけない、結婚してはいけないという異端の教えが出てきやすい土壌があります。主にあって食べて、そして結婚の中で性の営みを楽しむのです。

しかし、神の定めておられる枠から離れて、それを愛すると情欲になります。そして神ご自身よりも、それらのものを愛するとそれが神々となり、偶像となるのです。パウロが言いました、「コロ 3:5 ですから、地にあるからだの部分、すなわち、淫らな行い、汚れ、情欲、悪い欲、そして貪欲を殺してしまいなさい。貪欲は偶像礼拝です。」貪欲、度を越した情熱が偶像礼拝になります。

### 2B 神との交わりを阻むもの

イエス様は、復活された後に、ガリラヤ湖で漁をしているペテロたちに呼びかけて、大漁を与えら

れました。153 匹もとれたようです。イエス様はペテロに、「あなたは、これらのもの以上に、わたしを愛していますか。(ヨハネ 21:15 参照)」と言われました。もしかしたら、そこでまだはねている、釣れた魚のことを指しているのかもしれませんが。漁そのものが罪でも悪でもありません。しかし、イエス様以上に愛していれば、それはイエス様との愛の關係に妨げになります。ですから、良いものが悪になり、自分が神に敵対さえすることもあるのです。世を愛せば、御父への愛がないというのは、こういうことです。

ヨハネが、第一の手紙で、「私たちの交わりとは、御父また御子イエス・キリストとの交わりです。」と言いました(1:3)。神と親しい交わりをすることが、私たちが造られた目的です。前回の学びでは、「2:14 幼子たち、私があなたがたに書いてきたのは、あなたがたが御父を知るようになるためです。」とあります。信じ救われたばかりの人は、御父を知ります。小さな子が父親を知っているように、靈的な直感で父を知っています。ところが、多くの人が世に対する気遣いのために、そちらを優先させるために、神との交わりを疎かにするのです。世の愛は、御父の愛とは相いれることはできません。ちょっとしたことで、神との交わりよりも他のものを愛する時に、神との愛は冷えてしまうのです。

### 3B 神の敵

冷えるだけでなく、結果的に神に敵対してしまいます。なぜなら、自分の愛しているものが世であれば、世は神に反抗しているので、そこに関われば自分も神に敵対するのです。ヤコブが手紙の中で言いました。「4:4 節操のない者たち。世を愛することは神に敵対することだと分からないのですか。世の友になりたい思う者はだれでも、自分を神の敵としているのです。」グレッグ・ローリーという伝道者かつ牧者ですが、彼が回心したのは高校生の時でした。そこにヒッピーだったけれどもイエスを信じた若者たちが高校にやって来て、その一人が福音を宣べ伝えました。その時に、「あなたはイエスにつくか、イエスに敵対するかのどちらかしかない。」と聞いたそうです。グレッグは、自分はイエスに敵対するようなことはしていないと思っていましたが、イエスに積極的についているわけでもない、であれば、敵対しているということか？と思い、それがきっかけで信仰を持ちました。世を愛するか、神との愛の關係にいるかは、どちらかでしかなく、どちらもはできません。

### 3A 世にあるもの 16

<sup>16</sup> すべて世にあるもの、すなわち、肉の欲、目の欲、暮らし向きの自慢は、御父から出るものではなく、世から出るものだからです。

世にあるものが、この三つの欲なのだを教えています。前回お話ししましたように、エバが惑わされて、食べてはいけない善悪の知識の木から取って食べたのは、この三つの欲に引き寄せられたからでした。「創 3:6 そこで、女が見ると、その木は食べるのに良さそうで、目に慕わしく、またその木は賢くしてくれそうで好ましかった。それで、女はその実を取って食べ、ともにいた夫にも与え

たので、夫も食べた。」食べるのに良さそう、というのは肉の欲です。目に慕わしく、というのは目の欲です。そして、賢くしてくれそうだというのは、高ぶりですね。（「暮らし向きの自慢」と訳されていますが、自慢というよりも高ぶりです。）ある注解者は、それぞれの欲をこう分類しています。肉の欲は、「所有したい欲望」、目の欲は「見たい欲望」、そして暮らし向きの自慢は「自分への欲望」です。最後の自分への欲望とは、自分の存在が高まっていることへの欲望です。こう考えたら分かり易いかもかもしれません。

### 1B 肉の欲

肉の欲望が、所有したい、これを持ちたいということで、貪りという形で現れるでしょう。民数記に、荒野で「肉が食べたい」と言ったので、神はうずらを与えられました。それらを火で調理せずに食べたからでしょうか、貪ったので、激しい疫病で死んでしまいました(11章)。ヨシュア記では、エリコを滅ぼした後に、そこに残されていた美しい外套、銀や金を貪って、自分の天幕に隠したアカンがいて、彼のせいで、アイの攻略が初め失敗しました。彼を石打の刑に処してから、主が彼らを回復させ、アイに打ち勝つことができました。ダビデが、ウリヤの妻バテ・シェバを王宮に連れて来たのは、貪りであり、肉の欲です。争ったり戦ったりするのも、肉の欲が原因です。「ヤコ3:2 欲しても自分のものにならないと、人殺しをします。熱望しても手に入れることができないと、争ったり戦ったりします。自分のものにならないのは、あなたがたが求めないからです。」

### 2B 目の欲

目の欲は、見たいという欲望ですが、ダビデが王宮から、裸体のバテ・シェバを見たのは、まさに目の欲です。イエス様は、「マタ5:28 情欲をもって女を見る者だれでも、心の中ですでに姦淫を犯したのです。」と言いました。そして、同じ山上の垂訓で、興味深いことを語られています。「6:22-23 からだの明かりは目です。ですから、あなたの目が健やかなら全身が明るくなりますが、目が悪ければ全身が暗くなります。」と言われました。目に入ってくるものが、体全体に影響を与えるがごとく、目から入ってくるものが悪いものなら、自分の生活そのものが台無しになってしまう、ということですね。ヨブは、「31:1 私は自分の目と契約を結んだ。どうしておとめに目を留められるだろうか。」と言いました。女を、情欲をもって見ることをしない契約を自分に対して結んだということです。

### 3B 暮らし向きの自慢

そして、「暮らし向きの自慢」ですが、高ぶりと言ってもよいでしょう。バビロンの王ネブカドネツァルは、自分が成し遂げたこと、それを誇って、酔いしれました。「ダニ4:30 この大バビロンは、王の家とするために、また、私の威光を輝かすために、私が私の権力によって建てたものではないか。」まだ言い終わらないうちに、天からの声があり、野の獣と同じようにされると宣告を受けました。そして、愚かな金持ちは、大豊作の後に倉を立て直して穀物と財産をそこにしまい、「何年先もいっぱい物がためられた。食べて、飲んで、楽しめ。」と言ったら、その夜のうちに死にました(ルカ12:16-21)。このようにして、自分の成し遂げたことによって、自分自身を推し量る喜びに対して、

神は厳しい裁きを行われます。「箴 16:18 高慢は破滅に先立ち、高ぶった霊は挫折に先立つ。」

これら三つの欲について大事なのは、「御父から出るものではなく、世から出るもの」とヨハネが強調していることです。これらの欲について、そのような状況に置かれたのは神だとか言ってみたり、誰かほかの人のせいにしてみたり、また自然に与えられた欲望なのだから、仕方がないことなのだとして、開き直ることもあるでしょう。ヤコブは、自分の欲で誘惑を受けるのであって、神のせいではないとはっきりと否定しています。「1:13-15 だれでも誘惑されているとき、神に誘惑されていると言っははいけません。神は悪に誘惑されることのない方であり、ご自分でだれかを誘惑することはありません。人が誘惑にあうのは、それぞれ自分の欲に引かれ、誘われるからです。そして、欲がはらんで罪を生み、罪が熟して死を生みます。」

#### **4A 過ぎ去る世と永らえる信者 17**

**17 世と、世の欲は過ぎ去ります。しかし、神のみこころを行う者は永遠に生き続けます。**

世と、神の御心を行う者とを対比させています。世は滅び、御心を行う者は永らえます。終わりの日について話す時に、大患難時代にいかにして生き残るべきか？ということをお米ではよく話されますね。核シェルターを持ち、そこに食料を備蓄するだけでなく、武器も所持していくであるとか、いかに準備すべきか？ということをお話します。日本であれば、財テクであるとか、どうやって健康に生きられるかとか、この地上で生き永らえることばかりが語られます。けれども、滅びからの救いに最も安全、いや唯一の安全な方法は、神のみこころを行っていることです。

#### **1B 過ぎ去る世と世の欲**

先に、大バビロンが終わりの日に一日にして滅びることを話しました。ペテロも第二の手紙で、天地はすべて滅び去ることを話しています。「Ⅱペテ 3:10-13 しかし、主の日は盗人のようにやって来ます。その日、天は大きな響きを立てて消え去り、天の万象は焼けて崩れ去り、地と地にある働きはなくなってしまいます。このように、これらすべてのものが崩れ去るのだとすれば、あなたがたは、どれほど聖なる敬虔な生き方をしなければならぬことでしょうか。そのようにして、神の日が来るのを待ち望み、到来を早めなければなりません。その日の到来によって、天は燃え崩れ、天の万象は焼け溶けてしまいます。しかし私たちは、神の約束にしたがって、義の宿る新しい天と新しい地を待ち望んでいます。」滅びから免れるのは、聖なる敬虔な生活、つまり、ヨハネの言う「神のみこころを行う者」ということです。

ペテロは同じ第二の手紙の中で、滅びから免れた人たちのことを書いています。一人目は、ノアです。「2:5 また、かつての世界を放置せず、不敬虔な者たちの世界に洪水をもたらし、義を宣べ伝えたノアたち八人を保護されました。」不敬虔な者たちが、世界と共に滅びました。義を宣べたノアたち八人が保護されました。

二人目は、ソドムにいたロトです。「Ⅱペテ 2:6-9 また、ソドムとゴモラの町を破滅に定めて灰にし、不敬虔な者たちに起こることの実例とされました。そして、不道徳な者たちの放縦なふるまいによって悩まされていた正しい人、ロトを救い出されました。この正しい人は彼らの間に住んでいましたが、不法な行いを見聞きして、日々その正しい心を痛めていたのです。主はこのようにされたのですから、敬虔な者たちを誘惑から救い出し、正しくない者たちを処罰し、さばきの日まで閉じ込めておくことを、心得ておられるのです。」不道徳な者たちの放縦なふるまいとは、男どもが集団でロトの家にいた旅人を凌辱しようとしたことです。その旅人は御使いでしたが、男の姿を取っていました。集団で同性に対する強姦をしようとしていたのです。こういったことに、ロトの正しい心は痛んでいたのです。主は、そういった人たちを地上に滅びをもたらす前に救い出されるようにされます。具体的には、テサロニケ第一 4 章によれば、天からイエス様が降りて来られて、教会が空中にまで引き上げられることによって、世そのものから救い出されることによって、です。

## 2B 永らえる、御心を行う者

ですから、世においては戦いがあります。具体的に言うならば、世においては、世そのものが自分を憎みます。また自分の肉が御霊に導かれようとする自分に戦いを挑みます。「ガラ 5:17 肉の望むことは御霊に逆らい、御霊が望むことは肉に逆らうからです。この二つは互いに対立しているので、あなたがたは願っていることができなくなります。」そして悪魔が自分に戦いを挑んでいます。「Ⅰペテ 5:8 あなたがたの敵である悪魔が、吼えたける獅子のように、だれかを食い尽くそうと探し回っています。」悪魔、そして悪魔が支配する世、そして罪を犯すように刺激される肉、この三つ巴で私たちはこの地上を生きています。

しかし、これが終る時が来ます。最後まで耐え忍ぶ者は必ず救われると神は約束してくださっています。前回も、若い者に対する約束で、「悪い者に打ち勝った」と約束されていました。そして、ヨハネがここで書いているように、とこしえまでも生きるように約束されています。死んでもよみがえるという復活の約束が与えられています。そして、イエス様の復活がそうであったように、決して朽ちることのない、滅びない体です。新天新地における神の都には、永遠に神に仕える人々の姿があります。「黙 22:5 彼らは世々限りなく王として治める。」私たちは仏教のように、輪廻転生をするような、生きてはまた死ぬという繰り返しではありません。この地上に生を受けて、ただ一つしかないこの生に真摯に、誠実に応答するのです。その応答の先には永遠の報いがあるのだということです。